バレっ！　ドウッ！！

田中　大也

序章　うだつの上がらない奴との出会い　３
一章　駄目人間な天使たち　１７
二章　出会い、球技大会　夕焼けの色は何の色？　４４
三章　精霊の意外なお仕事　治安維持部隊編　９０
四章　バトル！　熱血！　そして記憶！？　１３２
五章　文化祭の変！？　敵はどこかにアリ？　１９０
終章　すいません、カーテンコール一丁になります！　２８２

序章　うだつの上がらない奴との出会い

「君に、力を授けよう。本来、人が得ることは叶わない力を」

気が付くと、俺は、どこかの山の中に立っていた。辺りには霧が立ち込め、三メートル先も見えない。地面には、膝くらいまでの高さの草が一面に生えている。目の前には見知らぬ老人がいて、何か大仰なことを語りかけている。老人は、白いローブを身にまとっている。神話の中に出てくる神様が、こんな格好をしていたっけ。

「力って、どんな？」

「うむ、さっきも言ったように、人間では決して得る事の出来ない類のものじゃな。例えば、英単語を一日で一万語覚えたりだとか、一日練習しただけで、今までより三十キロも重いものを持ち上げられるようになったりだとか」

英単語？　ウェイト？　随分砕けた喋りをする奴だ。神か？

「わしは、精霊の一種とでも名乗っておこうか。人間の中には、わしを神とあがめる向きもあるようなんじゃが、正直なところ、微妙、かな。彼らが考えるほど、わしには力はないし」

考えが読み取られてしまったようだ。老人にそれなりの能力があることはわかったが、それにしても、胡散臭さは拭い切れない。俺は思い切って、もう一つ質問してみることにした。
「あなたが、力を与えられる存在だったとして、俺に何をしろと？　大体において、この手の契約には、何らかの代償というか、それなりの見返りが必要なもんじゃないですか」
老人の表情が僅かに変化した。
「う、うむ。その通りじゃな。神から力を授けられた者には、それなりの忠誠心があることが多いし、悪魔や霊と呼ばれる存在から力を貰う際には、契約をして人間の方が相応の代償を払うことになっておるな。この二つのシステムが、今のところスタンダードじゃな。わしとしては、この旧態依然的なやり口を何とか変えたいとは思ってるんじゃが、生まれも育ちも悪いのでのう。学歴社会なのじゃよ、結構ここも」
「話の腰を折らんで下さいよ」
「す、すまぬ。で、わしの方は、『悪魔』的なシステムを採用している。つまり、能

力を得る際には、君に備わっているあるモノを、わしに差し出して貰うことになるな。悪魔たちの要求するレベルに比べれば、ほんのささやかなものじゃがね」
「それって、能力を授けるとは言わないと思いますよ」
なるほど、ここまでの話を統合すると、目の前にいる老人は、全知全能の存在ではなく、俺と何がしかの取引をしようと企んでいるらしい。
「そうですねえ、条件次第では乗ってもいいですよ」
老人の表情が、深い霧の中でもはっきりとわかるほどに明るくなった。
「本当かねっ。いや、良かった。最近の子たちはどうも慎重でな、いくら条件を良くしても、ちっとも首を縦には振ってくれないのじゃ。君が本当に物分りの良い子で助かった」
「条件次第、ですよ」
ぐむう、と老人は、歯の隙間からうめき声を漏らした。
「本来ならこれ以上の『安売り』はするなと、上司から固く言われているのじゃが、ここで契約を取らないと、やっと見つけた再就職をふいにしてしまう。情けない話だがな。よし、分かった。今回は特別サービスで、通常の一・五倍の換算レートを

保証しよう」
「それはどうも。で、俺はあなたに何を支払えばいいんですか？」
「一つ、質問をしよう。今の君にとって、一番恥ずかしいシチュエーションは何かね」
老人は表情を整えて、落ち着きを取り戻して、俺を指差した。心なしか、老人の小さな体が大きく見える。
「よく質問の意図が掴めないのですが。迫力充分に言われてもどうしようもないですよ」
「すまん。人と話すのが久しぶりなもので、質問力が欠如していたみたいじゃな。言い方を変えよう。今の君にとって、誰かに恥ずかしい事がばれるのはショックかね？」
ようやく質問の意図はつかめたが、やはり場違いであることは否めない。それでも俺は必死になって答えを探した。
「そうですね。やっぱり人に恥が知れるのは嫌ですね。それがどんな些細なものであっても」

老人は、俺の答えにゆっくりと大きく頷いた。
「全く正解じゃ。恥をかきたくないというのは、古今東西を問わぬ人の習性みたいなものじゃ。で、わしらが求めるのは、正しくそれでの」
「それ、とは」
「皆に向かって恥ずかしい姿を見せた分だけ、君の能力が加算される、ということじゃ」
え、ええーっ！　何ですか、その条件は？　「契約」だったら、もっとこう、かちっとした代償を要求するとか、寿命を縮めるとか、色々あるじゃないの。何でまた、俺の恥ずかしい姿が触媒になったりするんですか。
「その理由は、二つじゃ」
老人は、満面の笑みを浮かべて語りだし始めた。こう言っちゃアレだが、とっても素敵じゃない類の笑顔だ。
「一つは、契約にはそんな大きな代償はいらないということ。わしの能力がいい加減へタレなんで、その分君の支払うモノは少なくて済むって訳じゃな」
「ちょっと待て。じゃあ、一日で英単語一万語だとか、ウェイト三十キロってのは？」

「言葉のアヤじゃ。わしの上司ならそれくらいは出来るんじゃろうが、わしの力じゃ、暗記力三倍くらいがせいぜいかのう」
「ぬぬううっ、この詐欺師が」
今度は、俺が呻く番だった。老人は、そんな俺の心中など察しないかのように、淡々とした調子で説明を行っていく。
「もう一つは、わし個人の望みを叶えるためじゃ。無力な人間が、僅かな能力を得るために恥ずかしい姿を家族や恋人に見せ続ける姿は、いつ見てもいいものじゃ」
「きさまあっ」
「ほう、そんな口を利いていいのかね？　単なる人間が、このわしに向かって」
俺は奴に殴りかかる代わりに、強く唇を噛んだ。確かに、人外の者にうかつに手を出せば、どうなるものかわかったもんじゃあない。と言うかむしろ、物語ではたいがい返り討ちになるパターンだ。
「さあ、どうするね？　やるのかね、やらないのかね」
「帰らせてもらう」
奴はわざとらしく大げさに、両手を目に被せてのけぞった。

「残念じゃあ。本当に残念じゃのう」
「じゃかましいわっ。おい、ここはどこだ。どうやったら俺の家に帰れるんだ」
「前途ある若者が自ら死を選ぶとはのう」
なんだって！　全身に湧き上がってきた熱が、冷たいものにすり替わった。膝は震え、心臓は嫌な鼓動を立てている。
「おい、お前今何て言った、俺を、殺すのか？」
「何もわしが手を下さずとも、この条件に君が納得しなければ、死ぬしかないってことになるのう。ここは、この世とあの世の境目みたいな場所で、あの世に渡るのは簡単なんじゃが、あの世からこの世に戻ることはできない」
老人は、ひょうひょうとした態度を崩さない。恐らく何百年も生きてきたこいつには、人間の生き死になんてものは大したことではないのかも知れない。だが、俺にとっては大問題だ。言うまでもなくな。
「なな、何で俺がそんなところに？　交通事故に会った覚えもなけりゃあ、病気をした覚えもないっ」
「それは簡単。わしが、お主の魂をここに引っ張ったのじゃよ」

俺は、生まれて初めて、マスコミで言うところの「切れる少年」達の気持ちを理解できた。ナイフでも持っていれば奴をメッタ刺しにしてやるところだが、どうやら俺は丸腰で、しかもパジャマ姿だ。圧倒的に奴の方が有利なのは間違いないだろう。

「このまま首を縦に振らなければ、俺は一生ここにいる羽目になるのか？」

恐怖が再び熱さに、怒りに転化されたところで、俺は粘り強く交渉を進めることにした。奴はおいおい処刑するとしても、ここは絶対に生き残らなければならない。無論、奴のおもちゃになることを避けながら、だ。

「残念ながら、そうはならないんじゃな。手を透かしてみなさい」

―っ！　息が、俺の口から出て行くのを拒んだ。俺の手は、すでに手としての役割を殆ど失いかけていた。目を完全におおったのに、深い霧は何ら阻害されることなく、視界に入ってくる。

「もうしばらく経つと、君の体は完全に消え去ってしまう。霧に飲み込まれるようにな。その透け具合だと、残り五分も持てばいい方じゃよ」

心臓が、拍動を速める。肺が、酸素をひっきりなしに要求する。これまでの人生

の中で、一度も味わってこなかったリアルな死の恐怖が、全身にまとわりついて離れない。これは夢だと確かめようと、頬をつねろうとしたが、既に腕は俺のものでは無くなっていた。肩へ、そして腰に、耐え難いプレッシャーかかってきた。地面についた膝がめりこむかのような重さ。

「な、なあ、俺っまだっ、死にたくねえ。生きてえんだよっ」

俺は老人にすがり付くようになりながら、ようやく口を開いた。頭脳ではなく、本能的な欲求が搾り出した一言だった。

「それなら、取るべき道は一つじゃな。わしと契約を結ぶか？」

奴の口調には、してやったりの感情がこめられていた。だが、それを咎めるだけの余裕は、今の俺には残されてはいない。是も否もない位に強く、首を縦に振った。

「よろしい。では、契約の証を胸と右腕に与えよう」

奴が言った途端、着ていた上着が綺麗に吹き飛んだ。胸と右手から光が迸り、辺りを照らす。光の形から推測すると、どうやら「証」は、円状の形を成しているみたいだ。見る間に、体が存在感を増していく。

「ほう、もう落ち着きを取り戻したのかね。さすがはわしが見込んだだけのことは

ある。優秀、優秀」
「それで、俺は何をすればいいんだ？　これで、お前のコマになったってわけだろ」
　俺の頭は意外なほど冷えていた。奴に対する憎しみよりも、死地を脱した安堵感が上回っているのかも知れない。そんな俺の姿を見て、老人は大声を上げて笑った。
「コマだなどと、自分を低く見るのは良くない。わしは何も要求はしないし、強制もしないよ。ただ、期待はするがのう。藤堂君に課せられた契約の内容は単純じゃ。これからの人生の中で、困った事が起きたら、いつでもわしの力を使っていい。その代わり、しっかりと『料金を請求』させてもらうがの。まあ、魔王だの人類の滅亡だとかがやってこないリアル社会では、この辺が落としどころだったりするのじゃよ、正味の話」
「俺の名前まで割り出したにしては、随分と慎ましいですね。今日びの悪徳商法の方がよっぽどあくどい」
「彼らのやり口は、プロの悪魔業界でも話題になっとるよ。『人間の方がよっぽど悪魔的』という具合にな。人間は、あらゆるものから叡智を得る事のできる動物じゃが、それだけに、邪悪な部分にしても、歯止めが効かなくなってしまうものなのか

も知れんな」
「そういうもんですかねえ」
俺は、すっかり平静を取り戻していた。頭に昇っていた血も下がったみたいだし、一応目上？　のモノに対する最低限の敬語もばっちりこなせている。
「そうだ、藤堂君。君はわしが再就職して初めての契約者じゃ。その記念に、ささやかなプレゼントをやろう」
老人は、ぽんと手を打つと、俺の頭に両手をかざした。契約の件といい、了承を取らないで勝手に物事を進めるところからして、かなりの自己チューなのだろうか。できるなら友達にしたくないタイプだ。
「むう、これはぁー！」
そんなことを考えているうちに、全身が緑色に発光を始めた。腕や脚から、力が湧き出てくる。頭の中も妙に軽くなっている。しかし、
「今のわざとらしい声は何なんですか。俺、あんな喋りしないっすよ」
「ゴメン、わしが君の声色をコピーしたのじゃ。ゲームだったら、ヤマに当たるところではないか？　ここは」

致命的に信用できない老人だ。メリットのないことに人を巻き込んで全力を傾注するとは。
「体力と頭脳回転率を五割増しにしておいたからな。これで、全く勉強しないでも君の学校のレベルでならそこそこやれるじゃろう。わしに感謝せえよ。特別サービスじゃぞう」
奴はしれっと切り返した。俺の中の不審に、明らかに気が付いているにも関わらず、さりげに恩まで着せてくる。
「話はこれで終わりですか？」
冷たい態度で精一杯の非難を伝える。奴の態度には全く変化がない。
「まあ、こんなところじゃ。あ、そうそう、能力や契約についての細かい説明と執行の手伝いをするアシスタントが一人付くことになるのじゃが、あんまり気にしないでいいぞ。普段どおり生活していればいい」
「家に泊まりこむってことですか？」
「状況と、展開にもよるのじゃろうが、まずそんなことにはならないと思う。付かず離れずで、適当に付き合ってくれりゃあいい」

ふうん、と俺は生返事を返した。
（悪魔だか何だかわからない奴に契約を結ばされたってのに、俺の生活に変化はなし、か）
「どうじゃろうな」
「えっ？」
「これから君は、現世に戻ることになるが、まあ、適当に頑張ってな。歴史に残るような活躍はできんじゃろうが」
老人は、またも話の流れを無視して、勝手な語りを始めた。さりげに俺の評価が低めで腹立たしかったり。
「今まで通りの生活を送らせてもらいますよ」
俺の体と意識が下に引っ張られるとともに、周囲が少しづつ暗転して、老人の姿がぼやけていく。肉体や皮膚の感覚が、徐々に自分のものになっていくのがわかる。
「なあ、藤堂君」
老人は、にやけ面を引き締めて、俺の目を見据えた。
「体には、気を付けてな」

「はあ」
俺が返したのとほぼ同時に、老人の姿が溶け、辺りは完全な闇となった。
（何を言ってるんだ、あのジジイ）
……あの時、奴の真意に気が付いていれば、あんな目には遭わなかっただろう。
だが、普通の高校生の俺にとって、あれほどアレな日々が襲いかかってくることを理解しろなんてのは、全くもって無理な話だった。「宴」が、始まろうとしていた。

一章　駄目人間な天使たち

寝ているベッドに朝日が差し込み、俺の体を柔らかく照らす。外からは、小さく小鳥の鳴き声が響く。

「う……ん」

その声に誘われて、俺は反射的にまぶたを開けた。半身を起こして、周囲を見回す。ここは間違いなく俺の部屋だ。そのままの姿勢で、手を、そして足をばたつかせてみる。動く。何の問題もなく。

（ひょっとして、さっきまでの事は単なる夢だったんじゃないのか？）

そんな淡い希望を抱きつつ、右腕を捲し上げて見る。それを見て、俺は脱力した。

「やっぱり、夢じゃあなかったのね」

俺の右の二の腕にはしっかりと、奴が付けた「証」が備わっていた。しかも、ラーメンに入っているナルトのようにぐるぐる渦巻きとギザギザが組み合わさったスタイルだ。

「こんな素敵なデザインじゃあ、海にも行けねえよ。第一、親にバレたらどう言い